

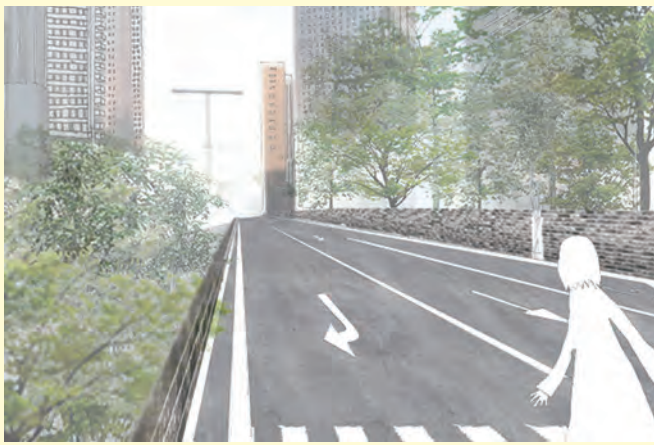
グラビア と き けんそう 時代の建層

建設残土を利用した、時代を積み重ねる都市更新の提案
(本文 P.80 ~ 85)

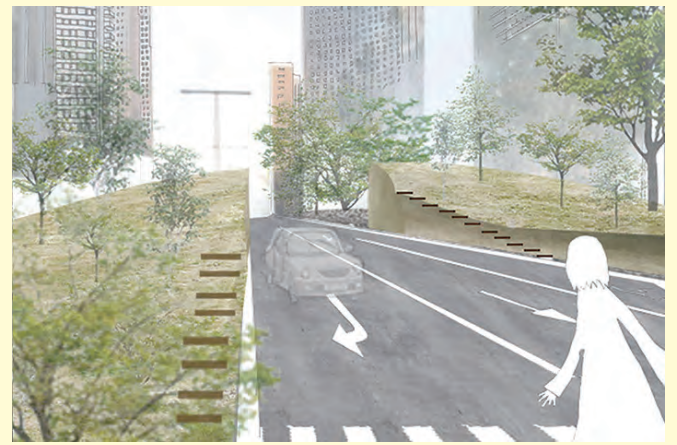


図ー1 「第29回 環境デザインコンペティション：時計装置」最優秀賞 受賞作品

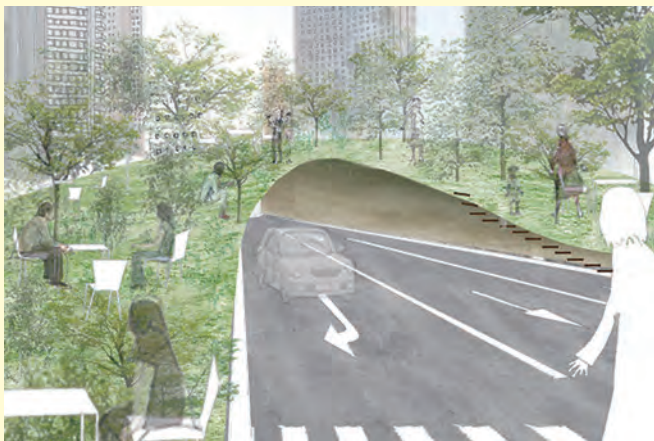
人がこれまでの歴史を積み重ね、時代ごとに変化する社会に適応するとともに、人の都市に対する価値観も大きく変化している。このような状況の中、現在の日本が抱える「都市の老朽化」と「開発によって増え続ける残土の処理」という問題に対し、都市で残土を活用することで解決の糸口を見出す。開発残土を利用して人工地盤をつくり、都市に森を還元し、人と建築にやさしい、未来の都市環境を創出する提案である。



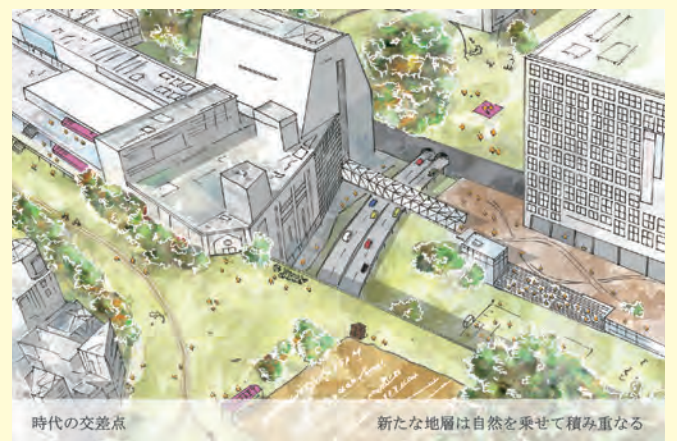
図一 4 計画初期段階イメージパース：各地から集められた残土が既存道路の両脇に盛られ，植樹により緑を増やす。



図一 5 計画第 2 段階イメージパース：徐々に盛土が高くなり，立体的なランドスケープを構築していく。高層ビルの足元に人々のアクティビティが形成される。



図一 6 計画最終段階イメージパース：道路脇の盛土がつながり，人は自由に歩きまわる。車両主体から歩行者主体となり，人々の居場所が増える。



図一 8 埋設化された車道が所々に見え隠れし，断層が見える。かつての時代の層を垣間見ることので、時の重なりを感じる。



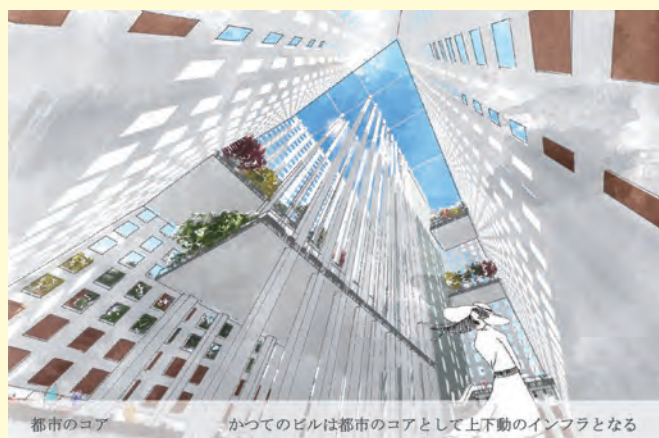
図一 9 丘が近づくことで高層ビルの上層階が開放され，都市と自然が共存する新しい風景が生まれる。



図一 13 地表より下の既存建物周囲は公園や広場となり，窓とつながる緑がビルのリビングとして人々の居場所となる。



図一 14 道路や敷地境界線によって区画された土地では，建物の区分や人の移動が垂直方向に制限される。ビルとビルの間を残土と緑で繋げることで，都市を立体的に再構築する。



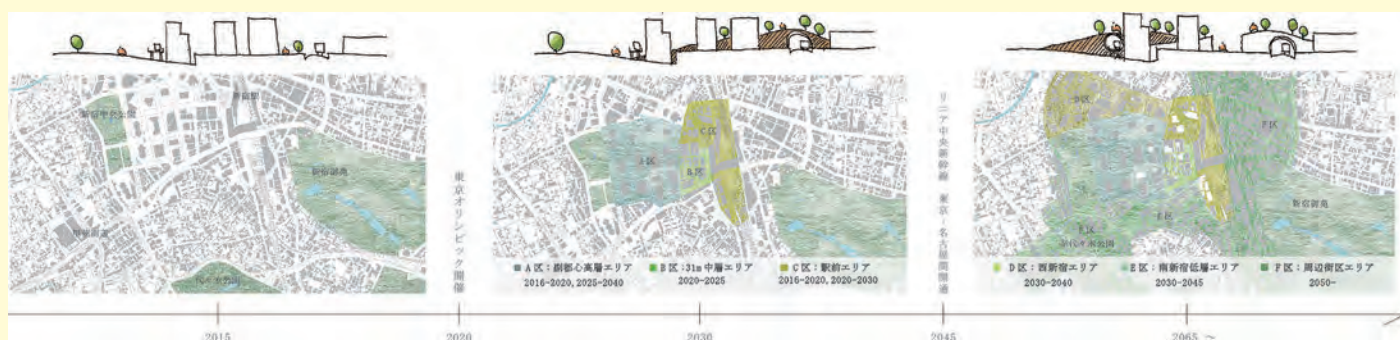
都市のコア かつてのビルは都市のコアとして上下動のインフラとなる

図一 15 かつてのビルが都市のコアとして機能し，人や空気，インフラの上下移動を促す。未活用の地下空間が蘇り新たな人の流れをつくる。



建層のふち 都市から来た緑が街となだらかに繋がる

図一 16 計画地の境界はなだらかなランドスケープによって周辺の街並みと繋がる。自然に包まれた都市の麓は，人々の居場所と出会いの場となる。



図一 17 本計画は木が土に根を張るようにゆっくりと都市の空間を立体的に構築していく。今ある公園の緑を繋いで大きな森の中の都市を形成していく。